

インターンシップ体験記

佐井 亮太（さいりょうた）：エセックス大学比較政治学修士修了

UNIDO（国連工業開発機関）

Programme Development and Technical Cooperation Division, Agribusiness Development Branch,
the Rural Entrepreneurship and Human Security Unit

（インターン期間：2014年7月1日～2014年12月5日（6か月間））

1. 部署の概要

国際連合工業開発機関（UNIDO）は、国連機関のひとつで、開発途上国において産業開発をととして貧困撲滅、包括的な国際化、持続可能な環境保全の達成をめざす機関です。1966年に国連の一部局として発足したのち、1985年に16番目の国連専門機関として独立しました。加盟国は2015年1月時点で、169か国です。

私がインターン中に所属したのは、産業のなかでも多くの開発途上国がメインとしている農業分野の開発を様々な側面から支援する部署で、その中でも若年層の起業家育成を促進するユニットでした。その手法としては、開発途上国の教育省や経済省をカウンターパートにして、UNIDO独自の起業家教育プログラムを、主に中等教育レベルのカリキュラムに導入するというものです。カリキュラムの内容としては、単なるビジネス知識を教えるだけではなく、いわゆる起業家精神を根付せ、若者が自発性や創造性を育む場を提供するというものでした。

2. 採用までの経緯

インターンできる国際機関をさがしているなかで、無給であるにもかかわらずその選考においてはある程度の競争があることを知りました。最初は興味のある民主化支援やガバナンスに関わるポジションを探し応募をしていたのですがなかなか思うように選考に進めませんでした。基本的に大学院生である内にしか資格がない国連機関でのインターンシップですので、まずは、自分の興味を優先させることはやめ、とりあえずはどこかに入ろうと考えるようになり、それまでの職務経験から国連機関でも工業化や産業開発にとりくむUNIDOに応募先を絞りました。

その時点では、自分の興味ある部署からのインターン公募はなく、直接同機関の人事担当者にメールを送りました。協力的に私の応募書類を内部で回して採用の可能性を探って頂きましたが、それも思うようにはいかず、一方では在ウィーン国際機関日本政府代表部にも協力をお願いし二方向からアプローチをしばらく続けました。その結果、本来自分の興味ある部署ではなかったのですが、上記の部署から連絡がありちょうどインターンを応

募しており、日本語ができることが条件の一つでもあることから、応募してみないかというお話をうけるに至りました。

選考としては、プロジェクトマネジャー2 人による電話面接でした。40 分ほどの面接のなかでは、過去の職務経験、修士課程の内容、さらには開発分野に対する自分の理解について質問を受けました。その後1 週間ほどで採用の連絡をうけることになりました。

3. インターン業務内容・インターン経験を通じた得た知見

インターン中の主な業務としては、①11 月に開催された国際会議の準備と②新規案件の形成にかかわるサポート業務でした。

- ① 会議の概要としては、これまで UNIDO が起業家教育プログラムの案件を通して培ってきた経験・知見を世界に周知するものです。招待したのは、これまで実際にプロジェクトを行ってきた開発途上国、および今後 UNIDO のプログラムに興味を示し将来的に採用を検討している国々の政策担当者や教育省の担当者、また先進国からも同分野の研究者や有識者など、総勢約 120 名ほどでした。3 日間をかけて、過去のプロジェクトの内容やフィードバックや、将来的な課題などについて、UNIDO からの情報提供だけではなく、参加者全員が意見を交換し合う、相互的で包括的な国際会議となりました。

(会議の詳細について以下参照

<http://www.unido.org/agro/entrepreneurshipcurriculumprogramme/conferenceonfosteringentrepreneurialyouth.html>)

会議の準備において、様々な業務に関わりましたが個人的に最も重点を置いていたのが、会議でプレゼンテーションをお願いする方や、パネルディスカッションを行うパネリストを探し招致することでした。必要なこととしては、UNIDO の活動や会議の趣旨についてよく理解し、広範なリソースから適任者を選ぶことでした。

会議の準備への関わりとしては、そのような対外的なことだけでなく、組織内部におけるものも様々ありました。会議用のポスター作りの為に、専門部署と協議したり、ドナーへの招待状を送る為に窓口部署と打ち合わせをしたりすることで、UNIDO 本部の組織構成およびそれぞれの役割・機能について理解を深めることができました。

日々世界中において様々な分野の国際会議が開催されていますが、それらが開催に至るまでにどのようなプロセスを踏み、またどのような問題が起こるのか、その裏側を知ることができました。

- ② 新規案件形成においては、おもに対象地域・国の情報収集・分析とプロポーザルのドラフト作成でした。プロジェクトマネジャーのアイデアを元に、関わる情報をメディアからや当該国で勤務するコンサルタントなどからの情報で現状を把握し、取り組むべき問題や、体操地域・国における特有の事象などを特定しました。また過去の案件につい

てもレビューし、実施面における課題などを抽出するなどしました。

また二国間ではなく、三国間援助であるうえではドナーの意向をくみ取ることも必要で、その国・政府が開発援助の分野のなかでも、特にどの分野に、またどの地域に主に力をいれているかを見極めることが必要でした。

特定のドナーの元ではなく、どこにも属さない第三者の立場で、援助案件を形成・実施できることは国際機関で仕事をする醍醐味であることを実感する反面、国籍の異なるドナーと受益国の間に立つことと、またインターナショナルな組織ゆえ様々な文化・慣習が入り混じる国際機関のなかで職務にあたるため、一つのプロジェクトを行うだけでも様々な側面に気を使わなくてはならず、なかなか効率的に事を進める難しさがあることも感じました。

4. インターン終了後の現在の業務・今後の抱負

現在は日本の開発コンサルで日本の ODA に関わっています。まずは自分が日本人であるなかで自国の開発援助案件に貢献したいという思いがあります。コンサルタントとして援助の現場で、日本の開発援助によって開発途上国の人々がどのように発展の道をたどっているかを目の当たりにしたいと思い、この道に進みました。

分野は経済開発で、特に開発途上国の公共政策への進言や行政能力の向上をサポートする援助案件に従事しています。具体的な期待される結果としては、貿易促進や民間セクター開発を促すことで、その国の経済発展・生活水準向上に貢献することです。

国際機関という立場で開発援助にかかわった経験・知見を活かし、今後は日本の二国間援助に貢献していきたいと考えています。

(2015 年 3 月執筆)